令和5年度　学校関係者評価書

060213研修部会

鈴鹿市立　愛宕小学校

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と評価指標	成果と課題（○:成果,▲:課題）	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	１．主体的・対話的な学び方を育成する授業への転換 ・指導主事招聘による地域教材を活用した生活科，社会科の研究授業：各学年１回 ・「全国学調」や「みえスタディ・チェック」の結果分析を踏まえた授業改善に関する研修会：１回（８月） ・ライフステージに応じた校外研修会への積極的な参加（受講履歴を活用）：一人２回以上 ・授業力UP5に基づいた授業スタイルの確立 →教「授業力ＵＰ５に関するアンケート」１００％ →児「授業で，自分の考えを発表していますか」８０％以上	○２～６年生までが１１月までに研究授業を行った。3学期に1年生を予定している。どの学年も基本に立ち返り、社会科・生活科学習指導要領と向き合いながら、地域などのように取り入れると効果的か学ぶことができた。また、子どもたちの学習へ向かう態度や主体的な問いをもつこと、対話を通した学習の深まりについて研修を深めることができた。 ▲研究授業を通して，次のような授業改善の視点も得を彫りになった。 ・その単元で指導すべき指導事項の捉えが弱く，授業計画が甘い部分があった。 ・単元の導入で，児童の問題意識（単元の？）が弱く，探究的な学びにつながらなかった。 ・地域教材や資料などの効果的な活用に課題が残った。　など 「深い学び」のある授業の実現に向け，全教員で共通理解を図りながら更に授業改善をすすめる必要がある。 ○学調等の結果分析に関する研修を８月に行い、本校の強みや弱みの共通理解を図ることができた。特に算数では、友だちの意見を自分の考えに取り入れ，ノートにまとめる力を養うために、全学年でノート指導に関する研修を１月に予定している。 ○全員が２回以上校外研修会に参加し、研修を深めることができた。特に，鈴鹿研究発表会に多数の教員が参加し，先進校の実践を学ぶ機会がもてた。 ○教「授業力ＵＰ５に関するアンケート」で，「資質・能力」「めあて」「端末利用」は100％達成できた。今後も引き続き取り組んでいきたい。 ▲教「授業力ＵＰ５に関するアンケート」で，「伝え合い（協働的な学習）」90.5％・「まとめ・ふりかえり」95.2％であった。コロナ禍鉄息したこともあり、今後は伝え合う学習を積極的に取り入れるとともに、まとめ・振り返りの時間の徹保を徹底したい。 ▲児「授業で，自分の考えを発表していますか」は75.7％，主体的に自分の考えを形成し，アウトプットする力が弱い。	○日頃の授業だけでも大変なのに，研修会への参加にも取り組んでいる様子がわかります。先生のレベルアップに繋がると共に，子供達の学力アップにも繋がると思います。 ○先生方が，様々な研修等に参加して，それを活かして取り組んでみえることは，とても評価できることです。 ○地域教材を取り入れた授業・学習は，地域の理解・地域の人とのコミュニケーションづくりに欠かせない。また，もっと地域の事を知りたいという興味が主体的な学びを導くものと思われる。 ○田植え等，米作りは貴重な体験で，地域の方の大きな協力の賜物である。 ○「あたごっちボランティア」による「あたごの灯り」や「スタンプラリー」は，主体性・協調性が育まれる大変良い機会だ。 ●難しいことは大事ですが，普段の生活の中で褒められることが自信につながるようです。これまで以上に褒めてほめて良い方向に導いて下さい。 ●コロナ禍鉄息にあたり，改めて「まとめ」「ふり返り」の時間は大切です。	○「学調」「みえスタディチェック」の結果から明らかになった本校児童の課題解決（対話を通して考えを深める力　自分の思いを表現する力の育成）のために，算数科を中心に授業力ＵＰ５（①「資質能力」の明確化②めあての設定③学習活動（協働的な学び）④まとめ振り返り⑤端末活用）に基づいた授業改善をすすめる。また，そのために研修会への積極的な参加に努める。 ・単元・毎時間ごとに学習の目的をもって指導を行う。また，その目的を児童と共有することでより主体的な学習をめざす。 ・「伝え合う」活動に関しては、児童に「相手意識」をもたせ，「わかりやすい伝え方」の指導を大切にする。 ・児童への明確な提示・適切なタイミングでの評価を行い，学習意欲を高める。 ・板書は1時間の学習過程を振り返る際に重要な役割を担っている。授業研究の際に板書を見合い，思考の流れに沿った授業展開と視覚的に分かりやすい板書の在り方を検討する。
	２．学力における基礎基本の徹底 ・国語・算数の自主公開授業（経験5年以下教員の授業の活用）：一人１回以上（経験年数に応じた回数） ・学習規律の定着に向けた　「がんばっ１０」強化週間の達成率：各学年８０％以上 ・算数学期末テストの平均正答率：各学年平均８０％以上 →児「授業の内容は，よく分かりますか」８０％以上 →保「お子様は，学習内容を概ね理解していますか」８０％以上	○経験５年以下教員の授業前に同学年担任が先行授業を行う形で進めたため，学級担任全員が，1回は自主公開することができた。 ▲経験５年以下教員の授業とその先行授業，全体授業研の事前授業において参観者が少なく，せっかくの公開の機会を生かしきれないことも多かった。授業日の周知が不十分であった。参観の体制を整える点も課題が残る。 ○「がんばっ１０」強化週間の各学年の達成率は，1年92％，2年80.２％，３年84.７％，4年93.６％，5年93.５％，6年96.２％で，全学年で80％以上と目標を達成した。 ▲目標は達成しているが、正しい姿勢の項目の達成率が最も低いことから、指導を継続していく必要がある。 ・算数－・二学期末テスト各学年の平均正答率は，1年88.７％，2年79％，３年93.６％，4年78.７％，5年79.２％，6年83.６％で、３学年で目標達成した が、３学年では及ばなかった。 ○ どの学年も「知識・理解」の項目は概ね良好であった。 ▲「思考・判断・表現」の問題において、児童の選択が不十分であることが分かってきている。思考過程を言語化したり、立式の意味を考えるなど、「学び合う」授業の中で理解が深まるように、授業改善を進めていきたい。 ○児「授業の内容は，よく分かりますか」92.０％，保「お子様は，学習内容を概ね理解していますか」91.８％で，子どもたちは，概ね授業内容を理解している。 ▲授業内容について，時間がたつと忘れてしまうといった混乱が見られることから，基礎基本の徹底や深い理解を図るための手立てを打ち続ける必要がある。	○「学力における基礎基本の徹底」では，▲が４つつけられているが，内容を見れば決して低いものではないと思います。こうした活動は継続性が求められるものであり，経験の少ない若い教師にとって大切なものであり，成長を期待しています。 ○子供達も保護者も学習内容を理解していると思います。全体的に問題ありません。 ○授業内容を理解している人が多くいるとの事。これからも分かりやすくご指導下さい。 ●若手教員の方を指導する立場の中堅の方も大変でしょうが，先行授業・事前授業を上手く活用し，スムーズな授業進行が実施されるよう お願いします。 ●学習規律で，正しい学習姿勢が良くないとのことだった。健康にも学習力にも関わってくる事なので，強化指導項目としてもらいたい。 ●「がんばっ10」とは何か →学習規律や適切な学習態度の定着をねらいとし，子どもたちに10項目の達成目標を提示し取り組ませるようしている。本校では，この取組が学習の基礎基本の定着につながると考えている。学期ごとに強化週間を設定し，意識づけをはかる。	○国語・算数の自主公開授業（経験5年以下研修授業前の同学年担任による先行授業）を継続し，授業力向上をはかる。 ○「がんばっ１０」の取組を通して，学習規律の定着をすすめる。 ・強化週間だけではなくふだんから意識づけを行う。 ・一つ一つの項目の基準が曖昧な面があるため，学校全体で共通理解をしたうえで指導する。 ○「思考力・表現力」の力の育成をめざす。算数科の学期末テストを活用し，取組の検証を行う。
	３．読書好きの子どもを育てる教育活動の推進 ・図書巡回指導員の活用（ブックトークなど）：各クラス１回以上 ・児童の年間貸し出し冊数　３５冊以上達成率：各学年８０％以上 ・図書委員会による図書館祭り：前期・後期各１回（計２回） ・読み聞かせボランティアの活用：低学年１６回以上　高学年５回以上 →教「朝読書(読み聞かせ)や図書の時間（主に低学年）を充実させ，子どもの読書習慣の育成に努めていますか」１００％ →児「読書（マンガ・雑誌は除く）は好きですか」：８０％以上 →保「お子様は読書（マンガ・雑誌は除く）は好きですか」：８０％以上	○図書巡回指導員の方には，全学年1回ずつブックトークなどしていただいた。教科書の内容ともリンクしていたので，よかった。 ○年間の貸し出し冊数は，11月の時点で合計17203冊の貸し出しで，平均すると一人43冊となった。年度末までにはほとんどの児童が35冊達成できそうだと思われる。 ○図書館祭りは前期は借りた人に図書委員が作成したしおりを配る図書館祭りをした。後期にも，図書館祭りをする予定である。 ○読み聞かせボランティアさんの全クラスのべ回数は，2学期末時点で，1年24回，2年22回，3年20回，4年24回，5年10回，6年15回行い，子どもたちはいろいろな本を紹介してもらい喜んでいた。 ○教師も図書の時間を設定したり，時間のあるときは本を読む時間をとったりして習慣をつけるように努めた。教室に教科や総合的な学習と関連した図書を展示するコーナーを設置する学級も見られた。 ▲児「読書（マンガ・雑誌は除く）は好きですか」84.８％ 保「お子様は読書（マンガ・雑誌は除く）は好きですか」60.５％ 児童は学校では本を読む機会を利用して，読書を楽しんでいるが，家庭では本を読む機会がない児童が多いということが考えられる。読書の習慣化を図っていく必要がある。	○読書好きの図書委員がつくったしおりを配った「図書館祭り」。熱心な活動が目に浮かびます。学校に伺った時，昼休みや放課後ではない休憩時間に図書室にちらほら児童がいることがしばしばです。 ○「栞子読書カード」は大変楽晴らしい試みと思われます。これをきっかけに読書好きになれば良いし，栞子の紛失も近付くのでは…。 ○本の貸出が多いのでびっくりです。先生方の指導が行き届いていると思います。 ●「本を見る・読む」という行動は，機会がなければ過ぎ去ってしまう。本を読む行為は学ぶことの基本であり，読んで楽問に思い，読んで共感し，時には読んで感激する。是非機会を数多く与えてやってほしい。 ●図書の貸出年間一人平均43冊，1か月3～4冊と たくさん借りているが，果たしてそれを読んでいるのでしょうか。学校での機会はあっても，家庭ではどうでしょうか。 ●「ボランティアの読み聞かせ」は直接耳から入ってくる読書であり，機会として大切なものではないかと思います。ただ児童が喜んでいるだけではなく，そのあとに続けられる活動にしていただきたい。 ●読書活動を通して，国語の力を伸ばして下さい。全ての学科に良い影響が出ますように。 ●読書とは，紙媒体だけのものを指すのか。最近は，タブレット端末やスマートフォンを使って，電子ブックで読書をしている人がいると聞いた。導入の見込みはないのか。 ●読書に関しては，家にいる時はゲームや遊びに夢中になり，学校にいる時より自由になって本を読む機会が少なくなるのは仕方ないのか。	○読書好きの子どもを育てる教育活動を推進する。 ・国語科をはじめ各教科の指導と並行した読書活動を工夫する。 ・図書巡回指導員さんの活用，読み聞かせボランティアさんの活用，図書委員会の活動等の充実をはかる。 ・スクリーンタイム削減の取組の一つとして，栞子読書や生活習慣チェック等，家庭と連携した取組を行う。

	４，家庭学習の定着 ・「家庭学習の手引き」の配布と保護者への啓発（懇談会・学年・学校だより） ・４月懇談会で校長から各学級へのオンライン講話 →児「宿題や家での勉強をきちんとやっていますか」８０％以上 →保「お子様は，家庭学習（宿題も含む）の習慣がついていますか」８０％以上 ・スクリーンタイムの削減：親子読書（ノーメディアデー）の取組：２回	○４月初めに家庭学習の手引きを配布し、４月下旬の懇談会時に校長からオンラインで家庭学習の大切さについて講話を行った。 △児「宿題や家での勉強をきちんとやっていますか」92.1% 保「お子様は，家庭学習（宿題も含む）の習慣がついていますか」82.2% 児童と保護者に意識の差が見られる。理想的な家庭学習の時間や方法等が両者の間で合致していないからだと考えられる。特に，保護者は宿題だけでなく，自主的な家庭学習習慣の定着を期待していると思われる。 ○スクリーンタイムの削減として，親子読書を２回，生活習慣チェックシートを１学期末，２学期末の２回実施した。 ▲１学期末の結果では，「テレビ・ゲームの時間を決めた時間以内にする」のできなかった割合が３・４・５年生が３割～４割と高い。他学年も２割前後である。２学期末の結果では，２時間以上使用した割合が，１・２・４年生が30%以上、５・６年生が40%以上となった。高学年は，睡眠時間が短いことも分かった。 ○スクリーンタイム削減を学校だより等で保護者に発信した。適切な使い方について、今後も啓発していく必要がある。	○宿題支援教室で学習ボランティアを行っている。以前は，そこで音読の宿題を保護者の代わりに聞いていた。現在は，音読の宿題を行う際，子どもが音読をしている様子を端末で撮影し，オンラインで提出することがあるので，「家で聞いてもらう」と言う子どもがいる。 ○子どもたちは，音読時に自分で端末を準備し，自分の音読の様子を撮影している。撮影しているので，子どもはいつもより上手に読もうとしている。撮影は効果がある。 ○「アサガオの観察」も端末で写真を撮って行っていると聞いた。 ○親子読書も立派な「家庭学習」かと思いますので，継続実施を図ります。 ○「テレビ・ゲームの時間を決めた時間以内にする」といった取組を通して，ルールを守ることの重要性を高めることが大切です。 ●図書の貸出年間ひとりあたり43冊，1ヵ月あたり3~4冊とたくさん借りているが，果たしてそれを読んでいるのでしょうか。学校での場合はあっても，家庭ではどうでしょうか。 ●子供と親との認識のズレがあり，子供としては精一杯していると思っているのに，親としてはもう少し頑張ってほしいと思っているのは，いつの時代も変わらない立場上の相違なのでしょうか。 ●児童は，宿題をすれば勉強している，保護者は基礎＋応用をすれば勉強している，基礎＋応用が家庭学習として思われている。 ●スクリーンタイム問題は大きな事柄だと思うので，しっこく継続して児童にも保護者にも啓蒙・啓発を図い	○「家庭学習の手引き」を配布し，懇談会や学年・学校だよりを通して，保護者への啓発を行う。 ○家庭での取組が難しい子は宿題支援教室をすすめる。 ・宿題への取組にとって有効な手助けとなっている。宿題をやり終えることで自信にもなる。 ○生活習慣チェックシート等の取組を行い，家庭学習の習慣化とスクリーンタイムの削減をめざす。
ＩＣＴの活用	５，授業や家庭学習における端末の効果的な活用 ・ミニ研修会（ICT支援員からの講話＋実践交流会）の充実：毎月１回（５月から） ・授業におけるICT支援員の活用：各クラス学期１回以上 ・朝部やICT支援員を活用した情報モラル教育：各クラス1回以上 ・端末を活用した家庭学習の工夫：授業日は４～６年生は毎日持ち帰り　長期休業中は全学年が毎日持ち帰り →教（中・高）「効果的な活用場面（個別最適な学びや協働的な学び）において，端末を活用した授業（授業力ＵＰ５）を行っていますか」１００％以上 →児（中・高）「端末を使った学習は，分かりやすいですか」８０％以上	○毎月ミニ研修を行うことで，canvaなど新しいコンテンツを授業で活用することができた。教員の端末活用が定着してきている。 ▲新しく効果的な端末活用が多くないことから，月１回のICT活用研修会の開催は多いと考えられる。 ▲１学期末ＩＣＴ教育に関するアンケート（教員対象）の受容小の結果では，「授業で児童が端末を活用する頻度　（週に２～３日以上）」65%，「協働学習としての活用（協働での意見整理）」40%，授業と連携した家庭学習」夜習型60%，連絡型5%，予習型10%であった。活用における質の向上に課題がある。ＩＣＴ活用研修会では，そういった内容を意識した学年の実践報告にするなど，研修会の中身を工夫する必要がある。 ○授業におけるICT支援員の活用については，全ての学年で行った。特に，低学年はまだ操作において不安な点が見られ，個別の指導を必要とすることから，効果的な活用ができた。 情報モラルに関する取組として，１・２年生は，いじめアンケートを取り組んだ際に、ネットとの正しい付き合い方を学習した。3~6年生は，11月授業参観時に教育支援隊より講師を招聘し，ＳＮＳトラブルに関する学習を行った。 平日の端末の持ち帰り頻度は，４～６年生は毎日，１～３年生は週1回持ち帰って端末で学習等に取り組んだ。長期休業中は全学年持ち帰り，端末を活用した家庭学習に取り組んだ。 ○毎日クロームブックを持ち帰ることで，児童が情報端末をより身近なものとしてとらえることができている。また，従来の学習方法と組み合わせることでより効果的であった。 ○教（中・高）「効果的な活用場面において，端末を活用した授業（授業力ＵＰ５）を行う」100% 児（中・高）「端末を使った学習は，分かりやすいですか」94%　端末を活用した授業が概ね定着してきた。 ▲ドリルパークについては，全体への定着という点では課題が見られる部分があった。	○家庭支援教室で学習ボランティアを行っている。以前は，そこで音読の宿題を保護者の代わりに聞いていた。現在は，音読の宿題を行う際，子どもが音読をしている様子を端末で撮影し，オンラインで提出することがあるので，「家で聞いてもらう」と言う子どもがいる。 ○子どもたちは，音読時に自分で端末を準備し，自分の音読の様子を撮影している。撮影しているので，子どもはいつもより上手に読もうとしている。撮影は効果がある。 ○「アサガオの観察」も端末で写真を撮って行っていると聞いた。 ○親子読書も立派な「家庭学習」かと思いますので，継続実施を図ります。 ○「テレビ・ゲームの時間を決めた時間以内にする」といった取組を通して，ルールを守ることの重要性を高めることが大切です。 ●図書の貸出年間ひとりあたり43冊，1ヵ月あたり3~4冊とたくさん借りているが，果たしてそれを読んでいるのでしょうか。学校での場合はあっても，家庭ではどうでしょうか。 ●子供と親との認識のズレがあり，子供としては精一杯していると思っているのに，親としてはもう少し頑張ってほしいと思っているのは，いつの時代も変わらない立場上の相違なのでしょうか。 ●児童は，宿題をすれば勉強している，保護者は基礎＋応用をすれば勉強している，基礎＋応用が家庭学習として思われている。 ●スクリーンタイム問題は大きな事柄だと思うので，しっこく継続して児童にも保護者にも啓蒙・啓発を図い ○ICTは使い方によって自由な面白い発想力を磨くことができる可能性がある。 ○授業参観時に掲示されていたGoogleジャムボードを使っての社会見学発表は，秀逸の出来映えでした。 ○音楽の動画撮影，アサガオの観察日記の作成，学習に係る写真の撮影等，端末を上手く使っている。 ●ICT機器の活用に関しては，管人間にとって中々難しい事ばかりです。便利で使い易いという良い点を活かして役立てていけば良いと思います。 ●持ち帰っての家庭学習では，SNSトラブルが脅威と感じる。 ●端末を使った学習が増えると思いますが，対面学習も大切です。顔の見えることは安心感にもつながります。 ●ICT教育は，手段であって目標ではない。 ●ICT教育が授業に効果的に活用できるようにすると同時に，それが教師の負担にならないような活用を考えてほしい。 ●「canva」とは何か？ →Canva（キャンバ）とは，オンライン上で使えるグラフィックデザインツールです。豊富な素材やデザインテンプレートを無料で使うことができ、誰でも簡単にさまざまな画像や動画を作成・編集することができます。児童は，社会見学や修学旅行の新聞づくり等に役立てています。	○「家庭学習の手引き」を配布し，懇談会や学年・学校だよりを通して，保護者への啓発を行う。 ○家庭での取組が難しい子は宿題支援教室をすすめる。 ・宿題への取組にとって有効な手助けとなっている。宿題をやり終えることで自信にもなる。 ○生活習慣チェックシート等の取組を行い，家庭学習の習慣化とスクリーンタイムの削減をめざす。 ○ＩＣＴ活用の質の向上をめざし，回数を精査しながら目的を明確にした効果的な研修を検討する。 ・パソコンスキルを教員が一定水準達することは必要である。時代によって求められる内容，授業や家庭学習での活用場面等が変化していく。先進例などを参考に，研修の内容を吟味し，効果的にＩＣＴを活用した授業力向上をめざす。
	６．誰もが居場所のある学校づくりの充実（不登校対策の強化と特別支援教育の充実） ・特ＣＯを核とした子どもの実態把握と早期支援対応：校内特別支援委員会・支援会議（随時） ・「支援を要する児童一覧表」作成　（学期毎の見直し） と「すずっこファイル」又は児童生徒理解支援シートの作成：対象児童全員・全教職員による情報共有：職員会議での情報共有（毎月） ・「鉾鹿市不登校支援初期対応マニュアル」に添った対応とＳＣ・ＳＬＳとの連携：欠席30日以上０人	○「鉾鹿市不登校対策初期対応マニュアル」を意識した対応に努めた。更に，児童の実態把握や情報収集をしたうえで，関係機関との連携，学校全体での組織的な対応を効果的にすすめる必要がある。 ○遅に遅，特別支援コーディネーターが来まり，校内特別支援委員会をもった。情報共有と対応策を考える機会を定期的にもち，担任一人が抱え込まずに組織的に対応をすすめることにつながった。 ○スクールカウンセラーと連携を図り，スクールカウンセラー・保護者・担任・養護教諭・特別支援コーディネーターで支援会議を持った。担任一人が抱え込まず，ＳＣの助言を受けながら，保護者と子どもの思いに寄り添いながら支援をすすめた。 ○スクールライフサポーターを効果的に活用することができた。6年男児1名は登校状況が改善した。 ○けやき教室との連携を図り，けやき担当教員・保護者・学級担任・特別支援コーディネーターで支援会議を持ち，不登校傾向にある児童への支援を行った。6年女児1名は登校状況が改善した。 ▲不登校傾向のある児童について，長期的な視点からの支援が必要であるため，年度が変わっても情報をしっかり引き継ぐ必要がある。現1年・4年・5年に気になる児童が在籍。 ○毎月の職員会議で子どもたちの課題を共有することができた。 ○電話連絡シート・家庭訪問シートを活用したことで，早く情報共有ができるようになった。 ○「すずっこ支援ファイル」を活用した，気になる子に係る支援方法をスクールカウンセラーの助言を受けながら担任等と話し合うことができた。あゆみ渡しでは，支援ファイルの見直しやまとめをすることができた。 ○支援を要する児童一覧表及び対象児童に児童生徒支援理解シートを作成した。（1月25日現在56名） ▲12月末現在，30日以上欠席14人（前年度比+9人），10日以上30日未満12人（前年度比+3人）。不登校児童数の増加傾向が懸念される。	○不登校等の事案に対して，一人の先生だけでなく全体の事として対応されていることがわかり，努力に感銘しました。 ○病になる子に係る支援方法をスクールカウンセラーの助言を受けている等，各機関との連携がなされていて良いと思います。 ○朝の登校時の見守りを続けていると，だんだん子どもの顔を覚えていく。約160名の子どもたちが，私たちが見守りをしている交差点を通っているが，正月明けから何人か顔を見ない子がいるように感じる。子どもたちのことをＯ配している。 ●挨拶については，体感的だが，昨年度に比べ出来ない児童やしない児童が増えてきています。時には，挨拶されたのが分かっていても無視する児童も出てきている。 ●出来ていなかったが，小さい声ながらもできるようになってくる児童もいます。声の大小を問うべきではないと思います。挨拶をするという大切さと重要性を教えてください。 ●声が小さいとか，下を向くとか，挨拶の様子からでもヘルプのサインがわかるのでは…。 ●不登校は全国的な問題であり，学校単独での解決は大変難しいです。子供達各々の家庭の事情が複雑な為，教育現場とは異なるケースが多い。かといって放置すべきではなく，根気強い多角的な取組が必要だ。 ●それぞれに理由・背景があるとは思いますが，不登校が増えているのは残念なことです。 ●全国的にも不登校児が増加しているとの事で，いじめが原因のものもあるのでは？ ●いじめについてのアンケートについて，児童回答で「あってはならないもの」と思わない子もいるし，保護者回答でもゼロでない結果が出ていて，恐ろしい感じがした。 ●社会的な状況により不登校が増えているならば，国レベルから対策が必要だと思う。 ●コロナが子どもたちの教師や友だち同士との関わり，子どもたちの発達面に影響を与えているのでは。 ●4・5年生は，以前のコロナ禍から始まった学校生活の影響があるのでしょうか。 ●先生達は今でも大変だが，子どもたち一人ひとりにより一層寄り添っていくことが大切だ。 ●教職が年度途中で交代したが，継続して愛宕小学校に任用されるのか。教職が不登校児童の対応に重要な役割を果たす観点からも，短期間ではなく，ある程度の期間の任用が望ましい。	○全教職員が情報共有し，担任が一人で抱え込まない体制づくりをする。 ・日常的に「家庭訪問シート」「電話対応シート」を活用したり，必要な児童は「すずっこファイル」「児童理解支援シート」を作成したりし，教職員間の情報共有を密にする。（欠席状況や支援内容を児童理解支援シートに記入し活用する） ・特別支援コーディネーターを中心に，校内特別支援委員会を定期的にもち，子どもの実態把握と早期支援対応をすすめる。 ○「鉾鹿市不登校支援初期対応マニュアル」に添った対応を重視する。 ・不登校支援の糸口をつかむために，不登校アドバイザーと連携しケース会議を持つ ・スクールライフサポーターを活用しながら，スクールカウンセラーやけやき教室等と連携を図り，日々の登校支援を継続する。 ○誰もが居場所のある学校づくりをめざす。 ・今後も継続して「いじめは絶対にしない・許さない」ことを指導する。 ・教師と子どもとのコミュニケーションを大切にし、表情の変化・挨拶の仕方など小さな変化を見逃さず，子どものヘルプサインを察知できる感覚をもつ。

長欠対策・人権教育	７．子どもたち一人ひとりの困り感に寄り添った指導・支援の充実 ・特別支援教育に関する研修会（困り感をもつ児童理解と支援方法について）：1回（８月） ・誰もが「わかる・できる」を実感する特別支援教育の視点をいかした授業づくり →児「授業の内容は，よく分かりますか」８０％以上 →保「お子様は，学習内容を概ね理解していますか」８０％以上	○「すずっこ支援ファイル」を活用した，気になる子に係る支援方法をスクールカウンセラーの助言を受けながら担任等と話し合うことができた。あゆみ渡しでは，支援ファイルの見直しや学期毎のまとめをすることができた。 ○幼稚園との引継ぎ方法を改善した。園児3名以上の園とは電話でなく，対面での引継ぎを行う形にし，より丁寧な引継ぎを行い，幼小との連携の強化を図った。 ○協力学級担任会を行い，特別支援学級担任と協力学級が特別な支援を必要とする児童への支援の在り方について互いに情報交換をし，学ぶ機会を持った。 ○関係機関（通級指導教室）と連携を取り，個に応じた対応を行った。 ○特別支援教育に関する研修「対応が難しい子どもや保護者につながるために」（７月）では，吉川先生による講話を聴き，発達に課題のある児童への支援や対応の仕方について学んだ。 ○児「授業の内容は，よく分かりますか」92.0%，保護者「お子様は，学習内容を概ね理解していますか」91.8%と答えている。通常学級にも学習への困り感を持っている児童が少なくない。これからも，特別支援教育の視点を生かした誰もが「わかる・できる」授業づくりのための工夫や手立てを継ていく必要がある。 ▲家庭の価値観も多様化している中，児童が抱えている困り感や特性に応じた対応に苦慮するケースも少なくない。担任だけでなく，校内特別支援委員会や関係機関との連携をより密にした対応が求められるが，迅速かつ円滑な連携がとれない事案もあった。	○学校としても出来る限りの事をしているのが理解できます。大変だと思いますが，引き続きよろしくお願いいたします。 ●一人ひとりのケースバイケースで大変難しい指導支援になるかと思いますが，いろいろの工夫が大切と思われる。	○全教職員が情報共有し，担任が一人で抱え込まない体制づくりをする。 ・特別支援コーディネーターを中心に，校内特別支援委員会を定期的にもち，子どもの実態把握と早期支援対応を行う。 ・保護者の思いに寄り添いながら，個に応じた支援をする。特性に応じた支援については，発達検査の結果を参考にしたり，SCからアドバイスをもらったりしながら，適切な支援方法を吟味し，それを関係者間で共有して対応にあたる。 ・支援員を活用する。また，必要に応じてその配置を随時見直す。 ○教員自身が，発達障害や特性のある児童の対応等に関する理解を深める。 ・発達課題のある児童への支援や対応の仕方，特別支援教育の視点をいかした授業づくりなどについて全職員での研修を行う。
	８．道徳性・社会性と自己肯定感の育成（いじめ・問題行動の未然防止） ・挨拶の徹底を指導し，挨拶が溢れる学校づくり：児童会の挨拶運動週1回 →児「すすんで気持ちのよい挨拶をしていますか」８０％以上 →保「お子様は，家族や地域の方に，すすんで挨拶をしますか。 ・子どもの上さや頑張りを認め，賛賞する雰囲気作りを大事にした学級づくり →教「子どもの自己肯定感を醸成し，学びを支えるために，よさやがんばりを認め合う児童間の温かい関係性づくりに努めていますか」１００％以上 →児「先生や友だちは，がんばったことをほめてくれますか」８０％以上 ・被差別の立場の子を核とした学級づくり：レポートの書き方研修会１回（5月）　レポート研修会2回（８月・学年末） ・いじめアンケート結果を踏まえた丁寧な聞き取りと迅速な初期対応：各クラス学期１回 →教「いじめはどんな理由があっても許さないという毅然とした指導を行っていますか」100% →児「いじめはどんな理由があってもいけないと思いますか」100% ・人権学習の授業参観：全クラス1回	○児童会が毎週火曜日に，西門・東門で挨拶運動を実施できた。 ●児「すすんで気持ちのよい挨拶をしていますか」90.8%，保「お子様は，家族や地域の方に，すすんで挨拶をしますか」80.0%学校内や教師のみでいる場以外でも挨拶を広めていきたい。 ▲挨拶について教員的には目標を達成しているが，子どもたちは挨拶を返しているだけで，自分から挨拶をしている児童は少ないのが現実である。 ○教「子どもの自己肯定感を醸成し，学びを支えるために，よさや頑張りを認め合う児童間の温かい関係性づくりに努めていますか。」100%，児「先生や友達は頑張ったことをほめてくれますか」84.6% 教師の評価が言い方やタイミングで子ども自身に伝わっていなかったり，児童の思いをすべて受けとめきれていなかったりすることは課題である。 ○人権教育に関する研修会として，講師を招聘したレポート検討会３回実施。被差別の立場の児童と周りの児童とをどうつなぐか学ぶ機会は意義があった。 ▲レポート研修のレポート内容が，本人の発達課題に視点をあてたり，生徒指導的な意味合いになったりするものも見られた。被差別の立場の子と周りの子との関係性に着目することをしっかり押さえたい。 ○いじめアンケートを学期1回実施。また，聞き取り用紙を統一し，丁寧な聞き取りと確実な個知の判断につながった。また，いじめ事案発生時には，校内いじめ防止対策委員会を開き迅速な対応を行った。 ○教「いじめはどんな理由があっても許さないという毅然とした指導を行っていますか」100% 児「いじめはどんな理由があってもいけないと思いますか」94.9%，いじめについて一部児童の理解が不十分であるため，あらゆる教科や日常生活の様々な場面で指導し続けていく必要がある。 ○「いじめアンケート」やレポート研修会などは，児童理解において大変有効であるため，引き続き実施していく。 ○2学期の授業参観で，子どもの権利条約についての授業をほとんどの学年で行った。授業の様子を学年通信に掲載し，保護者へ発信した。人として一人ひとりを大切にすることを伝えた。 ▲「子どもの権利条約」を，日々の生活の中に溶と込み，子どもたちが自他の権利を大切にできているか考えさせていくことが今後の課題である。 ○年間を通して，異学年交流の機会をもつ。1学期になかよし草取り・2学期になかよし遊びを行い、3学期にリーディングバディーの活動を計画している。異学年が関わる良い機会となった。	○約1年間挨拶運動をしているが，自分から挨拶をしてくれる子が確実に増えていて，こちらが声をかけても無視する子も減ってきている印象を持つ。自己肯定感というと無理があるかもしれないが，挨拶の声出しは気持ち良いという事を分かってきた子が多いのではー。 ○挨拶が苦ょが苦ょしてきるようになり，成長を感じる子もいる。 ○1年生が地域のボランティアを招いて「昔の遊び」を学んだ。参加したボランティアが，子どもたちを遊びで褒めることができた。 ○保護で挨拶運動をしていて，元気に挨拶してくれる子が圧倒的に多いです。友達同士仲良く登校しているのを見ていると，いじめのない愛育小学校ぶというイメージです。 ●兄弟や他人と比べるものではない。一人ひとりの良さを見つけて褒めることが大切である。 ●コロナ前は，道で散歩をしていると子どもたちが自分から挨拶してくれた。卒業生も進んで挨拶してくれた。コロナ禍以降，自分から挨拶できる子が減っている。挨拶できる子に偏りがある。 ●朝や帰りの挨拶ではなく，「ごめんなさい」「ありがとう」も大事な挨拶。しっかりできるようになってほしい。友達同士での励まし合いもあればいいです。 ●すすんでという点では，挨拶はまだまだの感です。こちらからして返事として挨拶できている様ですが。 ●こちらから挨拶をしたら，子どもたちも挨拶をしてくれる。自分から進んで挨拶できる子は少ない。 ●挨拶は横を見てするのではなく，出来れば相手の人に向かってして下さい。大人も出来ていないことがありますが。 ●高評価ではあるが，児童も保護者も，「いじめはどんな理由があってもいけないと思いますか。」という設問に対して，否定的な回答がのでないことが気になる。 ●先生が頑張って褒めることも必要でしょうが，褒める前に「共感してくれる」ことが必要ではないか。共感してくれることで小さな自信になり，肯定感が育成されていくのでは上思います。 ●親が子に「ダメだね」と言ってしまうと，学校や地域が褒めても上手くいかない。 ●自己肯定感の育成はとても大切だ。	○非認知能力の育成をめざし，いじめや問題行動の未然防止に努める。 ・挨拶は，生活指導部の月間目標に位置づけ，各学級での丁寧な声掛けを粘り強く継続する。 ・達成感が得られる教育活動を充実し，自己肯定感を高める。 ・いじめアンケート結果を踏まえ，丁寧に教育相談を行う。 ○人権教育アドバイザーを招聘し，年間通したレポート研修を行い人権教育の充実をはかる。 ・学級の人権課題を明確にし，児童の姿を通して取組を交流し，自分の人権感覚を見つめ直す機会を大切にする。 ○道徳性・社会性を養う取組をすすめる。 ・「子どもの権利条約」や日々の道徳の授業で学んだことを，日々の生活の中に溶と込み込むことが今後の課題である。そのために一人ひとりが自己を見つめ，思いを出し合い，それを受け止める居心地の良い学級づくりをめざす。 ・異学年交流の機会を設け，相互理解を図り，思いやりの気持ちを育む。
安心安全な学び場	９．落ち着きのある生活態度と健全な心の育成 ・挨拶・言葉遣い・時間・服装・無言指導などの凡事徹底に向けた取組：月別生活目標による重点取組 ・生活指導部会での情報共有と迅速かつ組織的な対応：毎月の生指部会での情報共有（「事案対応シート」を活用） →教「安全面を考慮して，学習環境や子どもの行動に注意を払っていますか」１００％以上 →児「学校や社会のきまりやマナー（交通ルールも含む）を守っていますか」８０％以上 →児「けがをしないよう，落ち着いて安全に学校生活を送っていますか」８０％以上	▲月別生活目標を設定しているが，子どもたちの日々の学校生活の中にしっかり浸透させる必要がある。 ○些細なことでも情報共有し，全教職員が同じスタンスで生活指導することが大事である。「内規」が立ち上がったことで，教職員の共通理解が図りやすくなった。 ○教「安全面を考慮して，学習環境や子どもの行動に注意を払っていますか」96.3% 児「学校や社会のきまりやマナー（交通ルールも含む）を守っていますか」90.8% 児「けがをしないよう，落ち着いて安全に学校生活を送っていますか」89.6% 児童のけがが昨年度と比べ減っている現状も踏まえ，児童の安全意識が高まっていることが分かる。 ▲一方で，教職の学習環境や子どもの行動への注意喚起は5%程度，児童の現状意識や安全な生活への意識は10%程度に課題がある。これは，決して少なくない数値である。引き続き，意識の継続・向上を促していきたい。学年間で，事前の準備を怠らず，児童の実態に合わせて安全な学習環境づくりに励む必要がある。	○けがが少ないことは，学校内が安全である事です。これからもより良い学校にして下さい。地域の者としてご協力させていただきます。 ○横断歩道の信号が点滅したり，時切の警報機が鳴ったりしたら，「渡らない」「渡る途中なら急いで渡る」を守っています。何度指導していて，いつも感心します。 ○読み聞かせで伺って，朝の会や読み聞かせの時は静かにルーティンとして過ごしています。健康観察もそれぞれの目直さんがそつなくこなしていて，廊下で見ていて気持ちの良いものでした。 ●まずは「元気な挨拶」ができる児童になって，言動や服装清掃等のマナーが熟成されると思われる。	○児童の実態を踏まえた上で月別生活目標を設定し，児童自身による主体的な取組をすすめる。 ・昨年度の実態を踏みたうえで，年度初めに月別生活目標の年間計画をたてる。随時児童の実態に促しているかを確認しながら指導を進める。 ・児童会や代表委員会の子どもたちが主体的にポスターを作ったり，低学年に呼びかけたりする活動を大事にし，意識向上をめざす。 ○問題行動が起こった場合は，迅速・組織的な対応を徹底する。 ・生指担当が中心となり，学年団・管理職と連携をとって複数対応をする。 ・関係児童の話を傾聴する姿勢で聞き取り，「事案対応シート」に事実を時系列で記録する。 ○怪我のない安全な学校生活の実現をめざす。 ・全教職員が，児童の危険な行動を見逃さず，即座に注意する。また，その状況を担任をはじめ全教職員で情報共有し，全児童に指導する。 ○愛宕小学校の内規を随時見直し，児童の生活の決まりなどに関する職員間の共通理解を図る。（次年度以降も，自転車のヘルメットに関する指導も含めて全教職員が一貫した指導を行う。）
	１０．学校の危機管理能力の維持・向上 ・危機管理マニュアルの不断の見直し：年度当初（全教職員による確認）年度途中（随時） ・生指事故等への対応訓練・事例研修会：3回以上 →教「緊急時（生指事故・交通事故・災害など）の基本的な対応について十分理解していますか」100%	○危機管理マニュアル社年度当初と，夏場（熱中症対応）の２回，見直すことができた。熱中症指数に基づく運動の指針を定めることができた。職員間の共通理解を十分に図ることができた。今後も危機管理への意識を高くもち，未然防止を重視した研修を引き続き行っていきたい。 ○窓ガラス飛散防止シートを貼る作業は進んだが，未だ貼れていない箇所があるため，更に進める。 ▲生指事故対応訓練・事例研修会として，１学期に応急手当・エピペン訓練，手首の大怪我お事例から学ぶ研修，熱中症対策研修を実施。 ○教「緊急時（生指事故・交通事故・災害など）の基本的な対応について十分理解していますか」100% 事案によっては、事故の概要や事後指導と対応について、打合せ等を使い、全教職員で共有を図った。	○危機管理マニュアルについて，不断の見直しが実施されており、改善されたマニュアルに基づいて子どもたちの安心・安全が担保されていると感じた。 ○緊急時対応の訓練（エピペン訓練等）は，日頃からの子供達の安全に関する学校の姿勢が良くわかりました。 ●「窓ガラスの飛散防止シート」は貼られていないところがあると言われていますが，進捗度はどの程度ですか。倒れたり飛散したりした場合は，大変大きな事故につながります。安全面は，ハード面で100%プラス教育指導で高めていただきたい。 ●避難訓練の重要性はご理解いただいていると思うが，局地的な豪雨等による浸水も考えられ，垂直避難等の訓練とともに，大地震に遭遇した時の避難として「武道館のスポーツ広場」への避難訓練を続けてほしい。 ●自転車でのヘルメット不着用が散見されるようになってきています。学校の管理下ではないため難しい面もありますが，ヘルメットの所持ではなく着用を徹底させるようお願いします。	○危機管理マニュアルを不断に見直し，全教職員の共通理解を深める。 ・危機管理マニュアルに照らし合わせて，児童の学校生活における安全確保のため職員研修を必要に応じて計画・実施する。

地域連携	１１．地域・家庭への積極的な学校情報の発信 ・学校だよりの発行：20号以上　ＨＰ：月2回以上更新 →保・地「学校は，学校だより・ホームページなどを通して，情報発信に努めていますか」８０％以上	○1月25日時点で，学校だより第26号，ＨＰ81回更新を行い，積極的な学校情報の発信に努めた。 ○保・地「学校は，学校だより・ホームページなどを通して，情報発信に努めていますか」保護者98.1%　地域100%であった。引き続き，学校教育への関心を高めるために，情報発信に努めたい。	○各月2回発行の「学校だより」作成は大変でしょうが，これが児童のいる・いない関係なく自治会の全戸に配布され，貴重な情報発信となっている。 ○自治会の回覧板に学校だよりが入っています。情報発信が良く出来ています。 ○学校だよりにより学校内の情報がよく分かります。大変努力されています。 ○臨時，学校だよりの発信はとても良いです。	○地域・家庭への積極的な学校情報の発信に努める。 ・学校だよりのマチコミ配信・ＨＰによる情報発信を行う。 ・臨時，児童の様子をＨＰで発信する。 ・各自治会には学校だよりを紙媒体で配布する。
	１２．社会科・生活科・総合的な学習の時間等における地域人材の活用：各学年1回以上	○全学年地域人材を活用した取組を行った。1年生：お花を植えよう，昔遊び，2年生：町探検　3年生：愛宕の秋づくり，昔の道具，4年生：納神会の方からごみ処理を学ぼう　5年：米作り　6年：平和学習に取り組み、より身近な問題としてとらえ、学びを深めることができた。	○各学年毎に地域の方からの人材応援にて，社会科・生活科に関する学習を深めており，将来必ず役に立つはずだ。 ○各学年に応じた各種の社会体験を実施している事は，素晴らしい事です。 ○学校内では，先生達以外にもボランティアさんの力が必要である事が分かりました。	○カリキュラムマネジメントを工夫し，地域の方と連携した学習を年間計画に位置付ける。 ・地域の方々のおかげで，地域教材の学習が成り立っている。まずは，私たち教師が地域に出かけ，地域の方々の協力を得ながら学びを深める。それを学習活動に位置付け，地域への愛着や誇りをもつ愛宕の子を育てたい。
	１３．学習支援ボランティア活動の充実・発展 ・読み聞かせボラ・図書館整備ボラ・宿題支援ボラ：週1回	○読み聞かせボランティアさんによる読み聞かせは毎週火曜日に実施。実施のべ人数は，2学期末時点で，1年24人，2年22人，3年20人，4年24人，5年10人，6年15人。子どもたちはいろいろな本を紹介してもらい喜んでいた。 ○図書館整備ボランティアさんは毎週木曜日に，図書室の本の整理を行ってくれた。 ○宿題支援ボランティアさんは，月・水曜日の6限目，外国籍児童に宿題の支援を行った。 ▲各ボランティアの人員確保をする必要がある。また，地域コーディネーターとボランティア担当教員の連携を図り，ボランティア活動の活性化をよりすすめたい。	○読み聞かせ活動は素晴らしいボランティア活動だと思います。 ●各種ボランティアの確保は，年々高齢化していく中で大変になってきました。定年の延期や再雇用制度の定着等が関わっています。名簿上はたくさん登録しているが，実際に活躍できる人は減少しています。 ●読み聞かせ活動について，現状人数が8人，月2回実施という事で，毎回参加できない方もいらっしゃる。増員が必要ではないか。 ●地域の若い世代のボランティアの人員確保も課題と思われます。	○学習支援ボランティアさんの活用をすすめ，ボランティア活動の充実をはかる。 ・ボランティア人材確保のため新たな参加を促す必要がある。（保護者世代が参画できるように積極的に働きかけていきたい。） ・地域コーディネーターとボランティア担当教員が連携をはかり，ボランティア活動を推進する。
	１４．学校・地域連携による活動の活性化 ・地域と連携した地域行事の活性化：ライブイン愛宕・灯りフェスタ・地震津波避難訓練 ・児童ボランティア（あたごっちボランティア）による地域行事への参画 ・　地域づくり協働会と連動した学校運営協働会の開催：６回 →地「コミュニティ・スクールとして学校・家庭・地域の連携・協働がすすんでいると思いますか」８０％以上	○コロナ禍を経て，地域と連携した地域行事（ライブイン愛宕・地震津波避難訓練）を実施できた。児童ボランティア（あたごっちボランティア）もほぼ例年並みに募集でき，地域行事（愛宕の灯り・スタンプラリー）への参画も実現できた。 ○地域づくり協働会役員3名が，学校運営協働会委員も兼ねていただき，地域と学校とのつながりを大事にした学校運営に努めた。学校運営協働会は４回実施済，3学期2回予定。 ○地「コミュニティ・スクールとして学校・家庭・地域の連携・協働がすすんでいると思いますか」93.3%　　児「地域の活動や行事に関心がありますか」86%　保護者「コミュニティ・スクールとして学校・家庭・地域の連携・協働は大切だと思いますか」95.7パーセント 家庭・地域のともにコミュニティ・スクールの意義を強く感じていただいている。児童の地域行事等への一層の参画意識の向上をめざしたい。	○「あたごの灯り」「ライブイン愛宕」は感況に絡えることが出来たと思われます。両方共，地域づくり協働会，校区自治会長会の大きな支援があったと思いますが，何より子ども達の活動の成果であったと思う。 ○「あたごっちボランティア」の子どもたちは，いろいろな行事に意欲的に取り組んでいた。地域づくり協働会として，今後もより一層支援していきたい。 ○児童とはかけ離れた活動ですが，海岸清掃ボランティアは，自分たちの置かれた環境を知るとともに，個と一緒になって「自分たちの海岸をきれいにする」という誇りが持てる活動だと思います。唯一地域の方々と一緒になっての活動であり，是非継続いただけるよう お願いします。 ○学校運営協働会は，毎回活発な意見が出て，有意義な時間を共有出来る場である。	○学校と地域との連携を活性化する。 ・高学年児童による地域行事への自主的なボランティア活動（「あたごっちボランティア」の活動）により，子どもたちの主体性や社会性が育まれている。このような活動を学校全体で積極的に支えていく。 ・学校運営協働会での熱議を通して，学校側と委員の方との意見交換を深め，学校経営にいかす。
働き方改革・魅力的な職場づくり	１５．二部会等の活性化による組織的・協働的な学校運営 ・学校経営方針と学校関係者評価の一体化と教職員への周知：年度当初（必要に応じて随時） ・各部長との校務の進捗状況に関する定期的な面談：月1回以上	○年度当初に学校経営の改革方針と合わせて，学校関係者評価における「本年度の活動（具体的な手立て）と評価指標」を教職員に周知し，今年度のめざす学校像を全教職員で共有して1年をスタートした。 ▲各部長とは，二部会前後に情報共有を図るように努めたが，十分な意見交換が弱かった。 ○職員会議の効率化が進んだ。 ・事項書の協議事項からリンクをはり，提案文書データを開く方法に改善したことで，進行がしやすくなった。 ・行事反省を紙への記述からデータ入力に変更し，担当者が取りまとめる作業が短縮された。 ・基本的に口頭提案をなくし文章提案にすることで，事前の提案内容が確認でき，当日の提案時間短縮につながった。 ▲データがあるフォルダを整理したことで，一部リンクが外れてしまったデータがある。データの徹底した管理と共通理解が必要。	○学校と学校関係者は，効果的に機能を発揮していると思います。 ●若い教員の方が多いことが強みとなる機，若手の方に外部の研修に積極的に参加してもらい，学校運営に関するケーススタディ等の情報を共有化する事を望みます。 ●小学校では副担任はいないのか。 ●時間外労働の減少，定時退校日の達成率アップの為，更なる努力を期待致します。 ●教職員の勤務時間はどうなっているか。残業をどう捉えているか。 ●コロナ禍明けで変し方ない部分があるかと思われますが，ワークライフバランスが崩れない様，自己の健康を最優先に効率的な業務の遂行，或いは業務の重要度による取捨選択を進めてください。 ●教師の皆様の時間外労働が多い事は聞いていましたが，少なくすることは難しいようですね。先生を増員することはできませんか。とにかく健康には気を付けて，子供達の為にもよろしくお願いいたします。 ●教職員の定時退校の徹底が大切です。イレギュラーなことが発生することもあるかと思いますが，年間行事への早い段階からの取組が必要です。	○二部会等を活性化させ，組織的・協働的な学校運営をすすめる。 ・今年度の反省を踏まえ，各部の意見を取り入れながら，学校経営方針を策定する。 ・各部長との日常的な対話に努め，校務の進捗状況を定期的に確認する。 ・（若手）教員の強みをいかした，学校運営をすすめる。 ○教職員間の同僚性を高め，風通しのよい職場風土を醸成する。 ・学年団の意思疎通を大切に，児童の指導にあたる。（特に，高学年は教科担任制を活用し，複数の目で児童の様子を見守る。） ・コンプライアンス遵守に関するミニ研修会を計画・実施する。 ○働き方改革の主旨を周知し，時間外労働時間の削減に努める。 ・高学年は教科担任制をとる。指導教科数を減らし，教材研究の負担軽減をはかる。また，複数教員で学年児童を見守り，間隙行動等の未然防止に努める。 ・各行事のねらいを明確にし，内容をスクラップまたはスリム化できないか，不断に見直しを図る。 ・職員定数の減に伴い，校務分掌組織の見直しをはかる。 ・時間外労働時間が月あたり45時間以上になった教員と管理職が相談し，その要因と対策を共に考える。
	１６．働き方の推進と効勤務時間の縮減 ・年間学習計画の見直しによる教育活動の効率化（カリマネの推進）：学期１回 ・職員会議データ管理の改善と事前の提案内容の確認による職員会議の効率化 ・端末活用による研究授業事後研修会の効率化 ・時間外労働月45時間以内（年間300時間以内） ・定時退校日，放課後開催会議60分以内：前年度実績より向上	▲各種ボランティアの人員確保をする必要がある。 ○時間外労働の年間合計時間は，目標値より60時間以上少なくなる見込みのため，全体的には達成する見込みである。 ▲定時退校日の達成率（12月末現在）平均71.4%/月（前年比▲18.6%），　放課後開催会議60分以内の達成率（12月末現在）平均59.9%/月（前年比▲20.1%）時間外労働・定時退行日・放課後会議ともに，前年比マイナスとなった。令和5年5月に新型コロナウイルスが第5類となり，少しずつ学校行事が戻ってくる中で，その企画準備の時間が増えたことが主な要因である。	●教職員の定時退校の徹底が大切です。 ●教職員の定年延期や再雇用制度の定着等が関わっています。名簿上はたくさん登録しているが，実際に活躍できる人は減少しています。 ●読み聞かせ活動について，現状人数が8人，月2回実施という事で，毎回参加できない方もいらっしゃる。増員が必要ではないか。 ●地域の若い世代のボランティアの人員確保も課題と思われます。	